

申命記4章1-9節

エフェソの信徒への手紙6章10-20節

マルコによる福音書7章1-8、14-15、21-23節

先週から教会北側の壁の工事が始まりました。暑い中、工事を行っていただき感謝です。公禱の礼拝が再開され、池ノ上駅から来られる方は、きっと新しくなった壁を、ご覧になると思います。

さて、今週から聖書日課の福音書が、「マルコによる福音書」に戻りました。今日の個所は、新共同訳で「昔の人の言い伝え」と小見出しがあります。その通りに、「昔の人の言い伝え」を題材にして、イエス様が教えている個所です。ただし、聖書日課では省略されている部分がありますので、物語の流れを明らかにしながら福音書を中心に学びたいと思います。

お話の場面は、ゲネサレトであると思います。すぐ前のお話の6章53節で、ゲネサレトという土地に移動しています。そのこのゲネサレトは、ガリラヤ湖の別の呼び方としての有名です。それはゲネサレトが、この湖の西側にある平地帯の名前であるからです。いずれにしてもガリラヤ地方です。

お話の始まりは、「ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちが、エルサレムから来て、イエスのもとに集まった」（マルコ7:1）です。この一文で推測できることは、イスラエルの北、ガリラヤ地方で、イエスという人による新しい活動が始まって話題になっているが、一体どのような活動なのか、エルサレムから権威ある方々が調べに来たということです。彼らは、イエス様の弟子たちが手を洗わないで食事をするのを見て、イエス様に「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか」（マルコ7:5）と質問します。それに対して、イエス様は、「イザヤ書」を引用しながら「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている」とファリサイ派の人たちと律法学者を批判します。この個所は、聖書日課にあります（マルコ7:6-8）。

次にイエス様は、ファリサイ派の人たちと律法学者たちを批判しますが、聖書日課では、この部分が省略されています。そこでは、彼らが「父と母を敬え」という律法の教えを、「昔の人の言い伝え」の中にある、「コルバン」という事柄についての解釈を用いて、無視していると批判しています。神の言葉である律法の教えが、人間の「昔の人の言い伝え」によって、無にされているという批判です。イエス様は、自分の主張の根拠となる聖書個所と実際の具体例を挙げて批判したのでした。

次に、イエス様は、そのことを踏まえて、群衆を集めて、「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい」（マルコ7:14）と教えを語ります。内容は、「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出

て来るものが、人を汚すのである」(マルコ7:15)です。群衆が突然呼ばれて登場し、聖書日課では、群衆だけが聞いているかのようにも読めてしまいますが、イエス様の教えを聞いたのは、群衆と弟子たちです。ファリサイ派の人々も聞いていたと思います。つまり、これらの三つの集団がイエス様の教えを聞いているということが重要です。

聖書日課では、続く弟子たちのお話が省略されていますが、そこでは、「イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた」とあります(マルコ7:17)。つまり弟子たちは、イエス様のたとえ・教えが理解できなかったのです。それゆえにイエス様は、「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分からないのか」と語り(マルコ7:18)、聖書日課にある教えが続くのです。つまり、聖書日課の後半部分のイエス様の言葉は、単に群衆にだけ語ったのではなく、弟子たちが理解していなかったので、弟子たちに対して語ったのです。

イエス様の教えを聞いた三者のなかで、ファリサイ派の人たちは、おそらくイエス様の教えに納得しなかったでしょう。群衆は理解したのか不明ですが、弟子たちは、群衆の前では表面上理解したような顔をしていたのかもしれませんが、実際にはよくわかっていなかったようです。あとからイエス様に質問しているからです。聖書日課では、この点が不明確になっていました。

ただし、ファリサイ派や律法学者たちの何がいけなかったのかがはっきりしていません。また弟子たちが、イエス様の教えの何を理解していなかったことも明確にされていません。ここでは、それらを含めて、この物語にあるイエス様の教えについて学びたいと思います。

物語では、「昔からの言い伝え」という言葉が何度も出てきました。それは、おそらく口頭で伝承された「口伝律法」のことであると思います。そもそも「律法」という言葉は、「モーセ五書」を中心とした文書「成文律法」と、それと同等の権威を持つ、語り伝えられた「口伝律法」があります。ファリサイ派の人々は、こちらも大切にしました。また両方に解釈があり、それらがイエス様の時代に編纂されてタルムードとなります。ここでの「昔の人の言い伝え」は、その「口伝律法」とその解釈のことを指していると思います。いずれにしても、イエス様は、神様が与えた「律法」の意図を、人間の「解釈」が無効にしてしまっていることを強く批判しています。ただし、イエス様は、「成文律法」のみが神様の言葉で、「口伝律法」は無視してよいと言っているわけではありません。イエス様の時代、サドカイ派と呼ばれる人々はそのように考えていたようです。それゆえ、サドカイ派は、「口伝律法」を大切にするファリサイ派の人々と対立していました。

また、ファリサイ派の人々は、「成文律法」と「口伝律法」の両方を大切にし、また生活の中で具体化しようとしていた人々です。その点では、イエス様と同じといえます。しかし、それでもイエス様が彼らを批判したのは、「口伝

律法」であれ、「成文律法」であれ、人間の解釈が、神様の言葉の内容を取り違えてしまうこと、あるいは、神様の言葉を解釈しようとする人間の思いが、主なる神様の言葉にある趣旨よりも優先してしまうことを批判したのです。

それでは、もっとも大切にされるべき主なる神様の言葉の内容、神様の意志とは何でしょうか。それは、何度も繰り返すようになりますが、主なる神様が天地創造の初めから、今もすべてを「よし」とされ、この地上のすべての存在を愛されていることです。そして、律法は、その神様の意思の具体化です。それは、神様の意志を示すと同時に、その愛への人間の応答の仕方が書かれているのです。

本日の旧約日課、申命記は、その書かれた律法の序論的な部分にあたります。それは「イスラエルよ。今、わたしが教える掟と法を忠実に行いなさい。そうすればあなたたちは命を得、あなたたちの先祖の神、主が与えられる土地に入って、それを得ることができるであろう」（申4:1）と始まっています。なぜ、律法を守るのか、それは、「命を得るため」です。そしてその命は、イスラエルにだけが受けられる、特別な恩恵ではありません。すべての人々が対象です。イスラエルとは、人々がそれを見て、主なる神様の存在とその意志を知るために存在するのです。それが神様の意志に他ならないのです。

ファリサイ派の人々の何がいけなかったのか。ファリサイ派の人々は、決して偽善者ではありません。非常にまじめな人々です。自分たちの行動を、厳密に口伝律法で規定して、神様の意志にそうように生活して、神様の意志を示そうとしました。しかし、律法を守らない人々、あるいは様々な理由で守れない人々に対する排他的な視点は、取り除くことができなかつたのです。律法を守らない人も主なる神様に愛されるとは思えなかつたのです。そのために、主なる神様のために活動しながら、手を洗わないで食事をする弟子たちを許せなかつたのでしょう。

それでは、聖書日課で省略されていますが、弟子たちは、なぜ分からなかつたのでしょうか。おそらく、手を洗うか洗わないかだけに注目したのでしょう。水が貴重なイスラエルでは、洗うことは、ぜいたくなことでもあります。弟子たちが、洗うことが大切なのはわかっているが、いつもの通りに手を洗わなかつただけというぐらいの理解だったとすれば、そもそも単に律法を軽視しています。それではファリサイ派や律法学者の批判にもイエス様の答えにも、それ以上に深い意味を見出せないでしょう。

しかし、イエス様は、水で清められることをよいことと前提とした上で、それが様々な理由でできる人とできない人がいるならば、どうするのかを問いかけているのです。そこから、そもそも何のために清めがあるか、あるいは、みんなが清くなるにはどうしたらよいかと問いかけているのです。

そのように問うことなく、わたしたちは、主なる神様が命じた清めを行っている、だから自分たちだけは清く命に至る。しかし、そうではない人たちは汚れており、滅びに至る。そう考える時、その人の中から決してよいものを出

ず、むしろ人を傷つけるようなものを出してしまう。それは、主なる神様の意思とも律法の趣旨とも異なる、そのことをイエス様は注意しているのです。

ここにあるイエス様の教えは、単に手を洗うか否かを超えて、ユダヤ教とは何か、教会の教えと救いとは何かを問いかけています。わたしたちの教会のこととしてとらえてみますと、教会は、イエス様の十字架と復活によって、すべての人、そして世界が救われるために始まりました。しかし、教会だけに救いがあるという傾向が強まり、それが長く続きました。現在は、主なる神様が世界を救おうとしている、その働きに教会が参与するという傾向になりつつあります。なりつつあるということは、自分たちだけが救われると教える教会も、まだたくさんあるということです。

それでは、わたしたちの聖公会はどうかというと、設立当初から教派の違いについては比較的曖昧であったと思います。しかし、教派の違いを超えて、主なる神様が世界を救おうとされている、と考えるようになったのは、20世紀に入ってからです。

何が神様の意志を示すのでしょうか。それは律法も含まれる『聖書』です。ただし『聖書』には、様々な部分があります。そして、それを理解するには、人間の解釈が必要です。今日の福音書の律法との関係と同じです。しかし、聖書が全体で語っている事柄は、人間の思いを超えて、神様は世界全体を救うことを欲している、ということに他ならないと思います。教会とは、そのことをイスラエルと同じように示すために存在するのです。そしてそれをどう具体化するか、それが教会とそこ集められる人間に任されているのです。

東京聖三一教会というわたしたちの教会が成立してから、一三〇年以上が経過しています。この代沢の地に転居してからも六一年となります。東京教区の教会の中でも最も古い教会の一つです。

その歩みは、今、ほかの多くの教会と共に、休止状態になっています。それは、わたしたちがなぜこの地に集まり、なぜ祈り、聖歌を歌い、様々な活動をするのかを改めて問う時でもあります。その問いに対する答えは、様々であり、またその答えに対する思いもさまざまであると思います。そして、それら一つひとつは尊いものだと思います。そして、それら一つひとつが、壮大な神様の計画に結びついています。

わたしたちが、公禱の礼拝再開はまだかという思いがあるとするならば、そしてそこに、教会の礼拝を通して、主なる神様の愛を伝える時が、早く到来してほしいという思いであるならば、再開した後の歩みは、より深まると思います。深められた様々な思いが再び一つに集められるからです。

約一三〇年前にわたしたちの教会が誕生した時と、聖公会という教会の状況も、この世界の様々な状況も変化しています。わたしたちの教会の歩みも、これからは単なる公禱の礼拝再開以上のことを求められると思います。しかし、わたしたちが主なる神様の愛を伝える器であることは変わりません。そのことについて、話し合い、深め合い、具体化できる日を待ち望みたいと思います。